

牧草と園藝



牧草地における雑草と上手な除草剤の使用

—北海道を主体として—

◎牧草地に雑草が侵入してくると、牧草の量、質共に低下してくる。一口に雑草と言っても、その種類は極めて多く、道東での調査ではタデ科、ナデシコ科、キク科、イネ科を主体とし、35科148種類に及んでいる。

◎除草剤の有効利用 いったん草地に雑草が侵入した場合、除草剤の適期利用によりこれをかなり抑えることができる。以下に北海道で利用されている主な除草剤とその使用方法を記した。

(1) トロポトックス (MCPB) ……混播草地

- イネ科、マメ科の双方に利用でき、アカザ・タデ等に効果は大きいですが、ハコベには効果が劣る。
- 播種後、牧草が本葉2～3葉期に達したころ、トロポトックス200～300ccを水70ℓに溶かして全面に散布する。

(2) プリマジ (DNBP) ……アルファルファ草地

- アルファルファ草地における有効な除草剤ではあるが、時としてアルファルファにも薬害が生ずることがあるので、散布時の気温、薬量には十分注意が必要である。なお、イネ科が混播された時には使用できない。
- 気温25℃以上の高温になると薬害を生じ、10℃以下では効果が劣るので10～24℃の曇った日に散布する。
- 散布量は 道央・道南 150～200cc/水100ℓ/10a
道東・道北 200～300cc
とし、本葉2～3葉期に散布する。

(3) アージラン (アシュラム) ……混播草地

- 混播草地内のエゾノギンギンに効果ある。ギンギンが抽苔してくると効果が劣るので、春か秋のギンギンの葉がよく展開しているところに散布する。高温時は薬害を生ずるので利用を避ける。
- 経年草地に対し春に散布する場合 (5月上～下) 200～300cc/水100ℓ/10a
- 経年草地に対し秋に散布する場合 (9月中～10月) 300～400cc
- 春に草地造成して秋に散布する場合、又は夏～秋に草地造成して春に散布する場合は薬量を200cc程度とする。
- やや濃い目にして(50～80倍液)、ギンギンに対するスポット散布(25cc)も効果が大きい。
- フキ、ワラビにも効果があるが、薬量が多く(1,000～2,000cc)なるため草地への薬害もかなり生ずる。

(4) ラウンドアップ……………非農耕地

- 非選択性の除草剤で、殺草成分が茎葉より吸収され、地上・地下部のすべてを殺す。また薬液が土に付着すると直ちに分散してしまうので、残効は全くない。
- 1年生雑草には200～500cc、多年生雑草には800～1,000cc/水100ℓ/10aを散布する。
- スポット的に雑草が侵入している場合、ゴム手袋をはき、その上に軍手をはいて、やや濃い目のラウンドアップ(50～80倍液)を軍手にひたして雑草をにぎってやっても効果ある。